

省 港 の 罷 工

——一九二五—二六年における労働運動の高揚と革命情勢の發展——

池 田 誠

一、まえがき

「廣東には、労働者・農民の世論が自由に發達する政治的條件がすべて存在する。代表團は、華南の首都の社會生活は、わきたっていることを強調する。」（「中國および日本における労働階級の狀態と労働運動の現況」全ソ同盟労働組合中央評議會代表團豫備報告書、一九二六年）。これは省港罷工の當時、廣東をおとすれた、ソ同盟の労働組合中央評議會代表團のいきいきした報告であるが、どうしてこのような狀態が廣東にあらわれたのであろうか。そしてそれは、どのようなであらうか。また、胡喬木は、「中國共產黨的三十年」において、「國民黨のこの大會（一九二四年の第一回全國代表大會。この大會で國民黨の革命的綱領が採擇され、改組が實

現した）は、事實上革命の波のたかまりの出發點となった。國共兩黨の合作により、孫中山・國民黨左派・全國人民と、帝國主義者・封建主義者およびその國民黨内での代理人である右派分子との間の鬭争は推進された。中國共產黨の提唱と指導と支持をえて、廣東に革命政府と革命軍事學校がつくられ、廣東反動派討伐の作戰がおこなわれ、全國的に國民會議の召集と不平等條約撤廢の人民運動がはじめられ、労働運動がふたたび高揚し、さらに農民運動もはじめられた」とのべているが、一九二四年から二六年にかけては、新しい労働運動の高揚と國民革命の目覺しい發展の時期であつた。しかしこのような革命情勢の發展も、二七年における蔣介石のクーデターによって逆轉し、後退と沈滞を餘儀なくされた。それは、革命情勢の發展の過程にめばえ、

生長し、革命の對立物となり、ついに革命にとってかわり、そして革命の決定的な側面となったのであって、突如としておこった奇跡ではない。このような國民革命の根據地となったのは、いうまでもなく廣東であつた。そして一九二五年六月、五・三〇事件に抗議して總罷工を敢行した省港の労働者は、革命のもっとも有力な力量であつて、それは、よく一六カ月の省港總罷工を堅持しぬいたことにもよくしめされている。しかしそのたかひの過程は、同時に反動勢力および國民黨右派との對決をさけられぬものとした。

それは、「中國における罷工戰術の最高の形態である」と鄧中夏が指摘しているように、中國民族のもつ最大の創意性を發揮してたたかわれたものであつた。省港の罷工こそ國民政府をつくりだしたものであり、北伐を推進したものであるであらう。したがって省港の罷工をめぐる諸情勢の展開のうちに革命をみることができるとし、また同時に反革命の胎動をつかむこともできるとわたしはおもう。

幸い、さいきん鈴江言一の「中國解放闘争史—中國無産階級運動史—」（一九五三・九、石崎書店）が刊行されたし、また新中國では、中國労働運動の育ての親といわれる鄧中

夏の遺稿「中國職工運動簡史」もでて、從來の省港の罷工に關する諸研究を、いっそう豊かにすることも多大であるとおもわれるので、ここに、これら二つの論著をもとしながら、とくに鄧中夏の「職工運動簡史」を中心に省港の罷工を紹介してみたいとおもう。これらと、すこし毛色がちがうが、アンドレ・マルロオの「征服者」は、ちょうどこのときの廣東・香港を、しかも、省港の罷工を中心テーマとして展開している。この文學は、わたしにいろいろの問題を考えさせた。一人の外國人として、このころのげしうごいてゐる中國を、じぶんの肉体をぶつつけることによつてとらえようとしているからである。本稿はそれらをもととしたいわば一つの資料であつて、同學の参考になればこれにこしたことはない。

ただ、わたしにとってなによりも不滿なのは、いずれも労働運動史であるので、胡喬木もいつてゐるような、農民運動についてはほとんどふれられていないことである。すでに一九二一年ごろから、共產黨員彭湃らによつて、海豊・陸豊兩縣に近代的な農民運動がはじめられ、二五年一月には、廣東全省にわたつて、一二五、〇〇〇名の農民が農民

組合に組織されたといわれている。このような農民運動の發展は、廣東における勞動運動の高揚、省港罷工、國民革命の發展とは決して無關係ではありえないとおもう。それは、一九二七年十一月、廣東コンミュニオンに先だつて、中國最初のソヴィエト權力が、海豊・陸豊にうちたてられたことによつても明かであろう。したがつて、省港の罷工においても、農民運動との關連をつかむことが、その成果をもういちどとらえなおしてゆく鍵であらうとおもわれる。

むしろわたしは、鄧中夏においても、この農民との關係がなお具體的にはつかまれていないところに、省港罷工・國民革命の性格があらわれているのではないかと考える。しかし、ここでは、なによりも鄧中夏の遺稿を資料として紹介するのが目的であるから、それにはふれないこととする。幸に舊滿鐵の調査物や、さいきん中國ででた、中國現代史資料叢刊の一つに、「第一次國內革命戰爭時期的農民運動」(一九五三・一〇。人民出版社)があるので、これらによつて、いすれわたし自身の考えをまとめたいとおもう。

* 鄧中夏の「中國職工運動簡史」には、わたしのみたところでは二種類ある。一つは、一九五〇年新華書店發行のものであ

り、他は中國現代史資料叢刊の一つとして、人民出版社から出版されたものである。本稿は前者によつてゐる。なおアン・ドレ・マルロオは、周知のとおり、一九二五―二七年時代の廣東で、廣東の國民政府の宣傳委員として活動し、廣東における武裝蜂起の時には、白兵戦にも参加したと、小松清はいつている。またマルロオの「人間の條件」は、一九二七年、「四・一二クーデター」のおこなわれた當時の上海が舞臺となつて展開されている。

二、省港罷工をめぐる諸事情

省港(香港・廣東)の罷工は、上海の五・三〇事件、あるいはそれにつづく漢口その他の諸都市における、中國民族にたいする帝國主義勢力の壓迫に抗議するためにおこされ、實に一六カ月の長期にわたつてつづけられた。それは、五・三〇運動いらい、全中國的に高揚した、とくに労働者を中心とする反帝國主義運動の、最後のしめくくりともいふべきものである。そしてまた、一九二一年に中國共產黨が成立して、明確な闘争と革命の方針をもつた組織労働者の力量を發揮し、辛亥革命の失敗からたちなおり、新しい革命を準備し推進したものであった。いわゆる國民革命は、この省港の罷工の過程に準備せられ、その權力そのものをそ

の中からくりだしたのである。このような省港の罷工に、われわれは、國民革命そのもののもつ性格をつかみとることができであろうし、また、一九二七年四月の、いわゆる蔣介石の上海クーデターも、やはりすでに省港罷工の最中に胎動していたのである。いま省港の罷工を考えることによって、それらのことを明かにしたいとおもう。

廣東の中華全國總工會*は、上海の五・三〇運動につづいて、すぐさま行動をおこすことはできなかった。それは、當時廣東では、劉楊戦争がおこり、革命派はその戦争準備に忙殺されていた。したがって、廣東の中華全國總工會は、上海の情勢をうけて、わずかに大衆的な示威大會を一度召集しえなすぎなかった。いうまでもなく、大會に罷工をよびかけることもできなかった。しかし、全國總工會は、劉楊戦争の最中にも、戦争終了後ただちに上海に呼應する準備をととのえつつあったし、香港に代表をおくって連絡を緊密にしていた。

そのころの、香港の労働組合の状態は、決して最上の條件にあったとはいえない。というのは、工會は香港に百あまりもあつたけれども、そのおおくは黄色組合あるいは同

業組合の工會であつた。全國總工會は、この年五月一日に發足したばかりであり、その影響力がもつともつよかったのは、當時共產黨に入黨した林偉民・蘇兆徴らが積極的に活動していた海員組合であつたが、その組合長は極右派がしめていた。そのころ、香港で活動していた共產黨員は、なお十人にみたず、しかも多くは最下層の埠頭労働者であり、また共產主義青年團は、人數こそ黨員よりおかつたけれど、その大部分は學生であつた。したがって、罷工の主体的勢力からいえば、實際に罷工がやれるかどうか、まったく自信のもてない有様であつた。かれらは、この弱い主体的勢力にもかかわらず、民族に奉仕するという冷厳な使命のまえに、最大の努力をおしまなかつたのである。まず、各工場に反帝と民族の解放をうったえるピラがまかれ、一方では、各工會の指導者たちとの緊密な連絡がとられた。上海の労働者のおこした反帝運動は、すでに全中國に異常な風雲をまきおこし、それは香港の各種労働者にも、きわめておおきな影響をあたえていた。このような情勢の中で、總工會の工作は積極的な反響によってこたえられ、數日もたたぬうちに、罷工の雰圍氣がたかまつてきた。

組織的な罷工をおこなうのに、當時、もっとも困難な事情となっていたのは、香港の工會の不統一であった。そのころ香港の工會は、大別して三派に分裂していた。それは、(一)工團總會派〓七〇餘の工會を包含し、大多數は手工業者の組合であったが、とくに海員組合が最大の産業労働組合であった。(二)華工總會派〓三〇餘の工會を包含し、前者と同じく手工業者の組合であったが、電車労働組合が重要なものであった。(三)無所屬派〓二〇餘の工會で、多くは機械、石炭・起重機・洋務の各工會などの大工會であった。これは、五月の第二次全國労働者大會に代表をおくって参加し、中華全國總工會は、この大會の決議によって結成されたものである。したがって、全國總工會は、いわばこれらの各派工會の統一組織として組織されたものであり、各組合員のおおきな信頼をかちえていた。

全國總工會代表は、六月十九日、各工會代表による連席會議を召集した。會議は、滿場一致で罷工を可決し、つぎのような、罷工宣言および要求を決定した。

アヘン戦争以來、帝國主義は、中國に對する經濟的政治的文化的侵略のほか、さらに武力による屠殺を加えている。これが

忍べるというなら、そのほかに忍びえぬものはないであろう。ゆえにわが全港工團代表連席會議は、上海・漢口等の各地と同一行動をとり、帝國主義と決戦することに、滿場一致決議した。われわれは民族の生存と尊嚴のために行動するのである。帝國主義の快槍巨砲は、たしかにわれらの死命を制しうるだろう。しかしわれわれ中華民族は、奮闘しても死し、奮闘しなくとも死するのだ。奮闘せずして死するのと、奮闘して死し、鮮血をもつて民族の歴史の光榮を鑄成するのとどちらがよいか。したがってわれわれは毫もおそれるところなく、強權と一死戦を決しよう。(二五七頁)

というのだ。さらにその要求は二大綱にわけられるが、第一は、上海の工商學運聯合會の一七條件^{*}の擁護、第二は、香港政廳にたいする次の六要求である。(一)政治的自由、(二)法律的平等、(三)普通選舉、(四)労働立法、(五)家屋税の値下げ、(六)居住の自由。

一日おいて第二回連席會議がもたれたが、會議は、罷工の統一的な指導機關——「全港工團連合會」を組織し、各幹部をえらんだ。

ところで、すでにのべたように、香港のおおくの工會は黄色組合であるか、または同業組合であった。それではどうして黄色組合の指導者たちが、罷工に賛成したのであろ

うか。もし上った反帝國主義の風潮が、これらの黄色指導者たちを、反帝罷工のコースに身動きならぬようにしぱりつけたことはいうまでもないが、そこにはまたかれら自身の論理と企圖があつた。黄色指導者たちは、これといつて定職をもたぬ連中であつて、かれらは徴収した組合費によつて生活していた。かれらは、罷工に加つても、決してじぶんの不利益にはならぬし、罷工後、組合の指導権を手中におさめることができるかもしれない。また一方では愛國といふかれらの虚榮心をも満足でき、他方では罷工の經費のピンはねという實質的な利益があるといふので、罷工に賛成した。この點については、もちろん全國總工會の側も十分考慮にいれていた。しかも、これらの黄色指導者たちを罷工連席會議によんで討議し、また罷工の指導機關に入ることもゆるしていた。それは、當時香港の工會における黄色指導者の影響力はなお強く、したがつてかれらがそつぽをむけば、香港の罷工は實現できないばかりでなく、混亂におちいること必定であつたからである。當時もつとも必要であつたのは、なによりも香港の罷工を實現することであつた。「そのためには、かれらにたいして一時容忍の

態度をとらざるをえなかつた」と鄧中夏はのべている。そのころのプロレタリアートと革命派は、やはりこのような主体的な弱さをもっていた。

しかし、すべてが、かれら黄色指導者のなすがままに放任されていたのではない。黄色指導者は、いざというときに、すっかりおしけづいて、罷工をさけようと策略をめぐらした。かれらは、全港工團連合會におおくの難題をもちだした。第一には、罷工労働者の食・住の問題についてである。かれらは、劉楊戦争はいまなおつづいている。罷工労働者は、どこで食と住をあたえられるのかとつめよつた。これにたいして工團連合會はこう答えた。劉楊戦争は三日以内におわるだろう。廣州にいつて寢食すれば問題はない。(第二日目に劉楊戦争はおわつた)しかし黄色指導者たちはなおも納得せず、代表を廣州におくることをつよく要求した。廣東政府は、共產黨の提議によつて、香港の罷工に賛成しており、工團連合會の代表は満足な回答をえてかえつた。つぎに第二は、香港政廳が、香港を封鎖した場合、これにどう對處するかという問題。かれらは、香港政廳が、もし戒嚴令を布告して、列車の運行をとめた場合、罷工勞

働者は香港から脱出できない。これにどう處置するのだと詰問した。蘇兆徴・鄧中夏らはこう答えた。たとえ列車の運轉がとまっても、廣東にゆけるいくつかの水路と陸路があるではないか。もし萬一にも、香港政廳がほんとうに交通を遮斷するなら、われらは暴動をおこすのだ。われわれには世界の労働者の同情と援助があると。第三の難題は、罷工をどの程度にするかという問題である。黄色指導者は、罷工の分割を主張した。それは、罷工にたいするかれらの恐怖をしめしている。もちろん蘇・鄧らは、總罷工を主張した。會議はいくどか暗礁にのりあげ、決裂の危機にさらされたが、ついに黄色指導者は、一齊總罷工に賛成した。しかし、黄色指導者のサポータージュの危険が、香港の總罷工を崩壊させようとしていたことは明かである。事態は一刻の猶予をもゆるさない。そこで、工團連合會の中心メンバーは、その夜ただちに會議をもち、まず、共產黨の指導下にあった、海員・電車・華洋印刷・洋務などの各工會が罷行を開始し、黄色組合に壓力を加えて罷工に参加させることに決定した。

こうして六月十九日よる、省港大罷工が爆發した。

*當時、全國總工會の執行委員は、林偉民・蘇兆徴・譚某（海員）、鄧培・王荷波・劉文松（鐵道）、李立三・劉少奇・朱某（漢冶萍）、鄧中夏・劉華・張佐臣・李森（李啓漢）（上海）、項英・許白昊（武漢）、郭亮・譚影竹（湖南）、劉爾崧（廣東）、何耀全・關某・鄭某（香港）その他の二五名。委員長林偉民、副委員長劉少奇・劉文松、祕書長兼宣傳部長鄧中夏、組織部長李森、經濟部長孫雲鵬。總會は廣東におかれ、上海に辦事處が設けられた。（一九四一—一九五頁）

**上海の工商學連合委員會は、上海總工會・上海各路商會連合會・中華學生連合會・上海學生連合會によつて組織されたものであるが、その経緯については、「職工運動簡史」二一五頁にくわしい。またいわゆる商工學連合委員會の、五・三〇事件にたいする一三條の要求は、六月七日に提出されたものであるが、「中國解放闘争史」三五二—三五三頁、および「職工運動簡史」二二四頁—二二六頁を参照。以下頁數のみを註記してあるのは、すべて鄧中夏の「職工運動簡史」の頁數である。

三、たち上る労働者たち

六月十九日、海員・電車・印務（印章をおす事務員）の各工會がまづ先に罷工に入った。洋務・起重機・石炭労働者、およびその他の労働者がこれにつづいた。最後に、機械・ドックの労働者も罷工を宣言した。前後約一五日間で、全

香港の労働者は完全な總罷工にいき、人数は約二五萬人におよんだといわれる。労働者は、列車、汽船などによって、前山・江門・三水の各口から續々と廣東にむかった。

廣東の沙面（廣州の外人居留地、租界のような性格をもつ）の洋務労働者にも、二十一日罷業が擴大し、沙面中國人援助上海慘案罷工委員會がつくられ、各國帝國主義の掠奪・砲艦政策に對抗する宣言を發表した。イギリス・フランスの陸戰隊は、沙面に上陸をはじめ、白鷺潭には、英・佛・日・米・葡の軍艦十隻が遊弋していた。^{*}こうして省港の歴史的大罷工がはじめられたのである。

このとき、黄色指導者たちは、徹底的に一齊總罷業をサボタージュしたが、労働者大衆は續々と罷工にたち上り、かれらはそれについてゆかざるをえなかった。事實、海員・電車・印務などの各工會が先頭にたたなかつたら、事態は、うたがひもなくかわっていったであらう。

また、海員組合の極右分子の會長も、罷工の決定的な瞬間に動搖し、罷工命令をだすことをしぶった。しかし、海員は、かれに迫り、「罷工命令をだすかださぬか。ださぬなら鐵拳をお見舞するぞ」とおとしつけたので、やむなく

罷工命令をだしたといういきさつもあった。また、香港機械の中國人會は、香港の帝國主義者の御用機關的な傾向がもつともつよく、工團連席會議にも出席を拒否し、終始罷工命令をだすことを拒んだ。しかしその所屬のドック労働者大衆は、自ら罷工にたちあがった。（これはドック労働者が、罷工におくれた原因である）

これにたいして香港政廳は、工團連合會の要求をすべて拒絶し、全市に戒嚴令を布告し、廣州にたいして、食糧・金銀塊・紙幣の輸出を禁止した。スパイを放ち、罷工の指導者を逮捕し、こう布告した。「上海の事件と本港とは無關係である。労働者は、安心して仕事に精出せばよろしい。妄動してはならない。妄動する者は嚴罰に處する」と。しかしこのような威嚇も、「一死戰を決しよう」とする労働者たちをおさえることはできなかった。政廳は、全陸戰隊を上陸させ、軍艦は海上を警備し、香港はまさに戰時状態に入つたけれども、労働者たちは、かえって萬死をおそれず、あいたすけて香港を脱出した。

*「支那近代百年表草稿」二八二頁を参照。

四、沙基事件（六・二三事件）

罷工中の労働者は、陸續と廣州にむかつて脱出し、六月二十三日、廣東市の労働者は、近郊の農民、青年將校、學生とともに、合計約一〇萬餘人が、市外の東較場で國民黨大會をひらき、工農民協會代表譚平山を主席に推し、國民黨中央執行委員兼廣東省長胡漢民が宣言を發表し、ついで、林森・廖仲愷・孫科・甘乃光・伍朝樞・鄒魯・汪兆銘・ボロージンが熱辯をふるった。大會の終了後示威行進にうつり、労働者・農民・學生・市民・軍人の順ですすんだ。隊伍が沙面對岸の沙基路にさしかかった時、英・佛陸戰隊は、突如土囊のかけから行進中の大衆に機銃掃射をおこない、同時に各軍艦も發砲して威嚇を加えた。約二分五秒後、五二人の中國人が即死し、一七〇餘人の重傷者、輕傷者無數をだし、現場は極度の混亂におちいった。上海・漢口・青島でやられたと同様の事態が、ふたたび廣東の民衆をおそったのである。この事件は、かえって中國民衆を激昂させ、各階層の人々は抵抗の決意をかため、まえにもまして熱烈に省港の總罷工を支持することになった。

* この發砲事件について、どちらが先に發砲したかということについて、資料はまちまちである。たとえば、示威行進の隊伍の最後列にすすんだ軍人の隊伍から、まず發砲されたというものもある。

五、罷工労働者の組織。

香港・沙面の總罷業、罷工労働者たちの廣東引揚げとともに、全國總工會は、香港・沙面の各工會代表者大會を召集し、罷工委員會組織法を通過させた。委員會は、一三人で組織して（香港九、沙面四）、最高の執行機關となり、そのうえに最高決議機關として、省港罷工工人代表大會がおかれた。この工人代表大會は、五〇名について一人の比例代表制をとり、合計八〇〇餘人の工人代表によって構成され、五名の臨時首席團が議事を運営した。

罷工委員會には、幹事局がおかれ、文書・宣傳・招待・庶務・交通・交際・游藝の七部がおかれた。別に財政委員會（罷工の經費をまかない、保管する）、會審處（裁判所。罷工破壊行為・食糧の密輸送・敵貨密賣などの犯罪者の裁判と犯人の拘留）、保管拍賣局（沒收した敵國商品の保管と競賣）、法制局（各機關の組織法および各種の處理細則の起草機關）、審計局（會

計検査局)、築路委員會、糾察隊(後述)、水路監視隊、罷工工人醫院、宣傳學校などの各機關が罷工委員會に直屬しておかれていた。

委員會は、また、労働者の食堂、宿舍を準備し、賭博所・アヘン吸飲所・空屋などを接收してこれにあてた。さらに廣東全市を八區にわけ、各區ごとに登記處をおき、罷工労働者を登記して證明書を發行した。罷工労働者は、證明書と食券があれば、各宿舍に宿泊し、どこでも食事をすることができた。その他、罷工の發展とともにおくの機關が添設せられた。

このような罷工委員會は、事實上労働者の政府であったといえる。のみならずそれは罷工に關するすべての事務を處理する絶對的權力をもっており、當時の廣東政府の干渉をうけなかった。これこそ、香港が、廣東の「第二政府」とよんだものである。

罷工委員會の委員長は蘇兆徴であった。

このような罷工の發展の過程で、黄色指導者たちは極力それを妨害しようとした。かれらはまず統一的な罷工委員會の組織に反對し、香港と沙面が個々の機關をもって罷工

をやるべきだと主張したが、代表大會の壓力によって失敗した。つづいて代表大會の比例代表制に反對し、各工會單位に代表を選出することを主張したが(黄色工會の大部分は、手工業の小工會で人數も少なかった)、それも代表大會によって失敗した。また、罷工委員會を、香港側から九名、海員・起重機・機器・石炭・洋務の各工會から一名、および工團總會・華工總會から各二名の代表によって構成しようという、香港の工會にたいする全國總工會の要望にたいして、自由選舉をもって反對したが、結果はやはり失敗した。こうして、香港における黄色指導者の企圖は次々に失敗し、蘇兆徴は大衆の支持によって委員長となったのである。

このような黄色指導者たちは、なおも香港の工團連合會に地位をしめ、月々の手當をえていたが、罷工を利用して私腹をこやし、悪弊をふりまいたし、總工會側もそれをゆるしていた。しかし、その後代表大會の大衆的批判によって、その醜行爲が曝露され、懲罰を加えられ、多數のものが逮捕され、會審處におくられて有期刑を宣告された。鄧中夏は、この代表大會について、つぎのような注目すべき指摘をしている。

今次の罷工には、この八〇〇餘人の代表者大會が、たしかに偉大な役割を演じた。罷工の戦術は、全体的な討論によって一致團結をえた。罷工内部の多くの紛争は、すべて代表大會の權威において解決された。黄色指導者や、一切の反動分子の陰謀は、すべて代表大會の嚴重な制裁をうけた。労働大眾の一切の意志は、すべて各代表が代表大會にもちこんだ。罷工のニュースも、代表が労働大眾に傳えた。罷工委員會の會務と財政は、すべて恒常的に代表大會に報告され、外部からの一切のデマは、すべて効果がなかった。罷工各機關の重要メンバーは、みな代表大會によって選舉され、不適任者は、ただちに代表大會が免職した。こうして、罷工各機關は墮落をまぬがれた。まことに、代表大會こそが、今次の罷工の基礎を築いたのだ。(二六一頁)

このような罷工委員會は、一切の權力をにぎっていたけれども、ただ殺人権だけはもたなかった。このことに關連して、廣東政府の檢察廳との衝突がおこった。というのは、罷工がおこると、香港は多數のスパイを放つてデマをとばし、罷工を混亂させ破壊しようとした。林和記はその一人であったが、かれは海員に職場復歸をよびかけた。會審處は、これに死刑を宣告したが、この報道は廣東檢察廳長の抗議をうけた。「法律を尊重し、人權を保障し」「罷工の破壊は、死刑罪にはならない」というのである。それにたいする罷工労働者のいい分はこうである。「こんどの罷工は

反帝國主義革命の緊急事である。平常の法律によって、國賊をゆるすことはできない。」その結果、廣東政府は、新しく特別法廷を組織して、これらの犯罪者を處斷することになった。

* 東亞研究所「支那近代百年表草稿」二八二頁の省港罷工の工團組織の圖表によれば、法政局は、工人代表大會に直屬することになっている。鈴江・鄧は、いずれも罷工委員會に屬するとしている。いずれが正しいかわからない。

* * 支那近代百年表草稿」によれば、労働者の教育機關として、労働學校・婦女労働學校・工人補習學校・工人子弟學校などがあげられている。

六、香港封鎖の實行——糾察隊の活動

六・二三事件に抗議して、各工會は自發的に糾察隊を組織し、香港を封鎖しはじめた。(香港の労働者は、すでに一九二三年の香港海員のストライキの際、香港を封鎖した経験がある) 罷工委員會が成立すると、各工會の自主的な糾察隊を統一して、總隊部を設け、總隊長一人、訓育長一人を置いて全体の中樞部とした(のち糾察七人委員會に改められた)。さらに總教練一人を置いて軍事訓練を施した。下部は、五大隊に

わけ（大隊長一人、大隊副官一人、訓育主任一人をおく）、各大隊は三支隊より成り（支隊長一人、支隊副官一人、訓育員一人）、各支隊はまた三小隊にわけ（小隊長一人）、各小隊は三班（班長一人）、各班は二二名から成っていた（この編成には、のちやや變更があった）。はじめ糾察隊は總數二、〇〇〇餘人であったがその後擴充された。糾察隊の任務は、各海口に駐屯して秩序を維持し、スパイを逮捕し、敵貨を沒收し、食糧を截留して、マカオ、香港、沙面を封鎖することであった。廣東がなお軍閥戰によって未統一のときは、糾察隊の封鎖線はただ珠江一帯にかぎられ、東は深圳から、西は前山におよぶにすぎなかった。その後廣東政府が東江南路をうばうと、糾察隊の封鎖線も、東は汕頭から、西は北海にまで拡大した。廣東沿海の各港口にもみな糾察隊が駐屯し、蜿蜒として旗幟がちらなり、うちならす金鼓の音がひびきあっていたという。

また糾察隊は小舟艇一二隻、無電裝置船數隻をもつて海上を往來巡視した。糾察隊の小銃は、約四〇〇餘挺といわれたが、つかえるものは二〇〇挺ばかりであった。このように、香港の封鎖にあたつて、糾察隊はもつとも目覺しく

活動した。

封鎖は、香港に深刻な影響をあたえた。香港は肉も野菜もえられず、豚肉一斤一元、鶏卵一個五角に暴騰し、牛肉は殆んどなくなった。道路にはちりあくたが山をなし、階上に居住する者は、糞を紙でつつんで道路になげすて、かてて加えてそれが暑夏の炎熱にむされて、臭氣紛々たる有様であった。香港はまさに「臭港」と化した*。しかしもつとも香港をくるしめたのは、空前の經濟的な打撃であった。

當時、香港の年輸出入額は、一億五、〇〇〇萬ポンドであつた（二五億二、〇〇〇萬元）。香港の罷工により、ほとんど海運業務は停止狀態にあつたが、つまり一月の罷工は、香港にたいし、平均二億一、〇〇〇萬元、一日七〇〇萬元の損害をあたえていたことになる。沙基事件後、沙面のイギリス總領事が書翰をおくり、「諸君がイギリス商品を買イコトするのはよいとしても、なんでまた罷工までやらないてはならないのだ」と訴えた秘密はここにあつた。

また一九二四年の輸出は、八八一萬ポンド、一九二五年は僅か四七〇萬ポンドにすぎない。一九二四年秋の輸入税は、總額一、一六七萬ポンド、一九二五年秋は、五八〇萬

ポンドと、當時の香港系の新聞は報じていた。（當時、香港の積出し貨物は、その $\frac{3}{4}$ が中國北部向け、 $\frac{1}{4}$ が南洋向け、 $\frac{1}{4}$ が中國南部向けであつたといわれる）また、海運についても、一九二四年の入港船舶は七六、四九二隻（五、七〇〇萬トン、毎日平均二二〇隻、一五六、一〇〇トン）であつたが、一九二五年七月以後、毎日平均三四隻（五五、八一九トン）にすぎなかつた。

このような状態の悪化は、ただちに香港の商店にあらわれ、香港政廳および新聞は、毎日のように商店の困窮を報じ、一九二五年の十一月、二月の間に、合計三、〇〇〇餘店が破産したといわれる。銀行は、罷工後には預金がとまり、逆に預金のひきだしが激増し、紙幣はбойコットされて現金が要求された。株價は六月二十二日から十月十九日の間に、匯豐銀行の株は、一、二九〇元から一、一四〇元に下落した。

このような情勢が、香港政廳の財政に無關係であるはずはない。輸出入の貨物稅收入が半減したことは前述のとおりであるが、地價も半値になり、家屋稅收入も一〇分の四に減少した。しかも支出はかえつて激増した。それは、罷

工に對處するために、多額の軍事支出を要したからである。當時香港政廳は、當時一、七〇〇萬元の預金をもつていたけれども、それを全部銀行からひきだし、それでもおひつかずに、緊急豫算をくまざるをえなかつた。それとともに、「人員整理と給料引下げ」が強調された。まさに香港は、廣東によつてその死命を制せられたわけである。

七月二十七日、香港では市民大會が召集され、罷業がつづけられるかきり、治外法權と關稅に關する會議をひらくことに反對する・河用砲艦、航空母艦を増加し、さらにイギリス兵一コ大隊を必要に應じて動員する準備を求める・廣東政府がイギリスの利益攻撃をやめぬ限り、それを敵國とみなす旨の通告を要求する・ことを決議し、イギリス皇帝に武力手段を發動して、廣東の「過激黨」を驅逐するよう電請した。しかしイギリス皇帝はこれを承認しなかつた。そして一方では、梁鴻楷・魏邦平をたすけて、そのころ新しく成立していた國民政府をたおそうとした（後述）。つづいて八月十五日、ふたたび市民大會を召集して、イギリス首相にたいし、怒りにみちた武力干涉の要請をした。しかし、當時イギリス本國の情勢は、香港の希望にそう決斷を

ボールドウィン首相に躊躇させた。(このころ、本國のプロレタリアートは不隠な形勢にあり、各植民地の動きはイギリスを窮地においこもうとしており、また帝國主義諸國間の對立は激化しつつあった。)^{*}「香港の困苦については、ロンドンではふかく憂慮している。ただ大局的にみて、いまは出兵の時期ではない。」これがボールドウィンの回答であつた。ロンドンは、三〇〇萬ポンドの借款を香港にあたえることによつて、責任をのがれようとした。當時の有名な演説家カールンは「こんどの借款は、一時的に、香港の危機をすくうだけのものにすぎない」との憤りをたたきつけた。香港は、本國からも、もっとも必要とした援助をえられずに、まさに絶對絶命の窮地においこまれていたのである。^{**}

* 香港の生活が、どのような状態におちいつたかは、マルロオの「征服者」によつて、いきいきとえがきだされている。

** 英字新聞「アジアティクス」は、「封鎖によつて香港のうけた損害は、毎日一〇〇萬ドルに上つた」と書いている。また、

「一九二五年十月香港の統計局は解散された。理由としては困難な經濟状態と、香港政府の財政難とがあげられている。しかし、このことは、實際には、廣東のボイコットの結果の統計的數字を祕密にする策略にはかならなかつた」とのべている。

七、國民政府の成立

省港の罷工當時の廣東の情勢はつぎのようであつた。劉楊はすでに平定せられたとはいへ、東江は陳炯明が占領しており、南路にはなお鄧本殷が割據していた。廣東省は各軍閥が割據して四分五裂の混亂状態にあり、香港におとらぬ危機が迫っていた。このとき、一〇餘萬の革命的な労働者が罷工によつて廣州に集り、革命政府を支持したことの影響はまことに大きい。それはとくに、國民黨左派に力をあたえ、共產黨の提議を採擇して、新政府——國民政府を組織し、新しい政治方針を發表して、軍政・民政・財政の統一、各軍にたいする政治訓練、軍需の獨立を主張した。こうして廣東省内部に新しい分化がはじまり、主として三つの政治的分派が形成された。(一)許崇智を首領とし、魏邦平・梁鴻楷および廣東系の軍閥がこれに屬する。(二)胡漢民を首領とし、官僚・政客がこれに屬する。(三)廖仲愷・汪兆銘・蔣介石を中核とし、國民黨左派と労働大衆がこれを支持していた。共產黨は、第三の分派と合作していた。新政府の成立は、三派の暗闘をはげしくし、胡・許の兩派は共

同してクーデターをたくらんだ。それは罷工委員會によって探知された。委員會は、ただちに罷工労働者を召集し、八月十一日裏切り分子蕭正の大示威行進を敢行した。その目的は、「國民黨左派を激勵して、斷乎たる處置を實行させる」ことにあったが、左派はかえって動搖した。胡・許兩派は、すでに公然と「反共」を宣傳した（劉楊も、反共をスローガンに叛亂をおこした）。二十日、廖仲愷が刺客の手にたおれた。左派はまさに一觸即發の絶對の場になっていた。ついに最後の決意を固め、梁鴻楷・魏邦平の部隊に解散を命じ、さらに胡毅生・朱卓文らを逮捕させた。それはいうまでもなく左派の軍事行動をともなったが、罷工労働者はその案内・密偵をすすんでひきうけ、積極的に協力した。つづいて胡・許は廣東をおわれたが、それは「休暇をうけて上海にゆく」（許崇智）、「ソヴィエトに使節としてゆく」（胡漢民）といていた。こうして、廣東の新政權は、完全に國民黨左派のにぎるところとなった。そして國民政府と罷工委員會とは、このとき完全に共通の運命にたっていた。しかし、内外の情勢は決して安易なものでなく、いっそうきびしいものであった。廣州では、デマが横行し、反動

は機をみてうごめき、民心は不安におおわれていた。省内では、陳炯明が惠州を占領し、鄧本殷は江門に進攻し來り、中山縣は土匪に占領されていた。さらに香港は北方の艦隊の南下をむかえ、陳・鄧の反攻をたすけていた。そこで罷工委員會は、國民革命軍の陳・鄧攻撃を支持した。また労働者たちは、輸送隊を組織して前線に軍需品をはこび、また宣傳隊を組織して、革命軍の進撃につづいて前進し、對農民工作をおこなった。またこれらの衛生隊は、傷病兵を救護し、糾察隊は革命軍とともに敵と戦った。革命軍の後方はこれらの労働者の援助によって固められ、進軍は迅速になされ、三カ月たらずのうちに、ほとんど廣東全省を國民政府の支配下に統一した。國民革命の根據地廣東は、こうして罷工労働者のたすけによって強固となり、それはのちの北伐を可能にする力量をたくわえる基礎となった。

八、罷工にたいする罷工委員會の中心戰術

罷工のはじまった二カ月間というものは、香港の封鎖によって、海外との交通は完全に遮斷され、どんな國の船舶も廣州に入港することはできなかった。香港封鎖は、ただ

敵香港だけでなく、じぶん自身をも封鎖してしまったわけである。それではこの封鎖は、廣州にどのような影響をあたえたであろうか。

主食の米であるが、廣東は從來海外からその供給をうけていた。しかも香港が、貨物の輸送をすべる門戸であった。したがって香港の封鎖は、逆にみずらをもこの米の輸送路から切斷することになったのである。海外との直接交通をひらくほかに、この困難を打開するてはない。またその他の生活必需品にしても、廣東の工業はなお未發達であつて自給できず、とくに燃料の缺乏がひどかつた。したがってこれらもやはり、直接海外からもってくるよりほかない。これらと關連して、商人の營業問題を解決しなければならなかつた。事實、沙基事件後、愛國の雰圍氣は非常にたかまつた。そこで商人が一時的に商賣を放棄しても、それは忍びえないことでないかもしれない。しかしそれが長期にわたり、情勢がかわれば、その情熱はひえ、商業の再開を要求することは當然である。さらにも一つの問題は、帝國主義諸國の連合という問題である。英・米・日の各帝國主義は、年來、激しい廣東市場の爭奪戰をやつていた。「中

國海關貿易冊」によれば、英國貨は年々減少し、日・米の貨物は、逆に年々増加している。廣東の排英は、日・米にとつては、英國にとつてかわる絶好のチャンスだと考えさせている。したがつて、もし廣東があらゆる外國商品を買イコットするなら、それは必然的に日・英・米をおいこんで、共同して、中國に對抗させる、という事態をうむ可能性がある。罷工委員會はこのことをみぬいて、一種の「特許證」制度を決定し、「およそ英貨・英船、および香港を經由するものをのぞき、廣州に直航することがでる」ことをきめた。この特許證は、罷工委員會・商務廳・公安局・外交部が共同署名して發行した。特許證制度が實施されると、上海・シャムの商船が傳聞して來航したし、またアメリカの大來公司・日本の三井洋行その他の各國の商船も業務再開を要求した。上海—廣州、シャム—廣州間の航路が直接廣州に通じ、日に四一〇餘隻の船舶が入港した。これは廣州はじまつていろいろの新現象であつた。

この特許證の、「およそ英貨・英船、および香港經由のものをのぞき、廣州に直航することを許す」という原則は、省港罷工の中心戰術であつた。この戰術によって廣東の經

濟的困難をのぞき、廣東商人に中立を維持させ、帝國主義の連合戦線を分裂させ、そして廣東經濟の獨立的發展をうながした。省港罷工が一六カ月の長期にわたって堅持されたことは、この中心戦術によるものといえるであろう。

このような中心戦術のもとで、労働者と商人との連合は、具體的にどうであつたろうか。當時廣東の商業ブルジョアの罷工にたいする態度は、最初、とくに沙基事件がおこると、かれらは愛國的な感情につつまれ、したがって公然と罷工に反対しようとはしなかった。しかしまた、積極的に罷工をたすけようとしなかった。たとえば、罷工がはじまると、罷工委員會側はつぎのように廖仲愷（當時、國民政府財政部長、兼廣東政府財政廳長）に要求した。全廣東市の商人を召集して大會をもち、罷工の經濟的援助について協議すること。しかし、商人はわずか數千元を寄附してその面子をたもつたにすぎなかった。罷工委員會の特許證制度宣布後に、商業ブルジョアは委員會を攻撃しはじめた。それは、胡・許兩派の陰謀——クーデター計畫と密接に關連していた。當時政局はなお不安定であり、内部的にも委員會の困難期であり、かれら商業ブルジョアはこの點をみぬき、

胡・許兩派と連絡して、そのさしがねをうけて特許證制度の反對におどりでたのである。その理由はこうだ。「手續が煩雜でかつ費用が嵩む」と。その時の罷工委員會の態度は、それは枝葉末節の問題であり、手續はできるかぎり簡單にし費用もへらす、特許證を取消することはできぬというのであつた。程なく廖仲愷事件がおこり（八月二十日）、國民政府はこれにたいして斷乎たる處置をとつた。國民政府は危機を安定にかえることができた。罷工委員會もまた自動的に特許證をとりけし、さらに「労働者・商人の連合」を提唱し、四つの商會に、善後處置を協議することを要請し、「工商連合會」を組織した。委員會は、特許證の原則——イギリス帝國主義のボイコットをまもることを提案し、工商善後條例を決定し、共同で捺印して布告した。いご、罷工委員會だけが船舶の出入港證明を取扱い、そのほかの各廳局は署名せず、手續費用もすべて減免された。突如としてあらわれた政局の安定、反動にたいする委員會の機敏な處置と自動的な特許證取消によつて、商業ブルジョアは口實を失い、イギリス帝國主義ボイコットの原則についても反對でなくなつた。というのは、もし反對すれば、自

らイギリス帝國主義の走狗であることを認めることになるからである。商業ブルジョアは、こうして、罷工委員會の提議をうけいれざるをえず、委員會と商會との連名捺印の布告が全市にはりめぐらされたのである。

これいご、商業ブルジョアは、罷工に反対せぬばかりか、かなり援助したことは事實である。しかしそれは、かれらの革命性のあらわれというよりも、經濟的原因によるものであった。廣州が海外との直接交通をはじめのちは、商業はにわかに盛んとなった。罷工開始時はいうまでもなく、それ以前にくらべても一段と隆盛になった。それは、つぎの一九二四年の各月と一九二五年の同月についての粵海關の收入統計表をみても明かであろう。

月 分	1924年	1925年
7 月	229,523	70,711
8 月	281,816	150,180
9 月	289,632	232,407
10 月	242,078	306,125
11 月	319,835	337,532
12 月	282,564	304,838
	1925年	1926年
1 月	257,541	422,971

(單位は海關兩)

上表によれば、二五年七月に罷工がはじまった當時は、海關の收入は、前年同期より $\frac{2}{3}$ を減少しており、この時、廣東の商業

は崩壊の極點にあつたといふべきである。十月に海外との直接交通がひらかれてのちは、完全に復舊しただけでなく、月をおつて増加し、二六年一月には前年同期より $\frac{2}{3}$ を上廻っている。どうしてこうなつたのであろうか。第一に、いうまでもなく、廣州が海外との直接交通をひらいたからである。第二には、廣州が香港・マカオと交通を遮斷し、しかも從來マカオから内地に移輸入していた貨物が、すべて廣州を経由することになったからである。廣州の間屋業がにわかに繁榮した。當時のブルジョア新聞も、「このような狀況は、まことに一般人士の意想外のことである」とのべた。こうして、罷工は廣州の商業を妨害しなかつただけでなく、反對にそれを繁榮させた。

こうした情勢のもとで、廣州の商業ブルジョアは、罷工委員會の、「工商連合」というスローガンをうけいれることができた。とくに、一九二六年一月、香港政廳が硬化して罷工解決の條約をうけいれなかつた時(一月二十五日、香港は「罷工解決の停止」を宣言した)、廣東の四商會は大會をもち、つぎの決議をして義心をあらわした。

今次の罷工は、人民が自ら發動したものであり、愛國運動で

あり、國体と人格をたたかうとするものである。各労働者諸友は、このように熱烈に自らを犠牲に供してたかつている。われわれ商人も、連合一致して熱烈にこれを援助し、香港をして、復工の條件を完全に容れしめることを目的としなければならぬ。(二七二頁)

このようなことは、決して理由のないことではなかったのである。

九、省港罷工と國民黨

省港罷工をおこしたのは中華全國總工會であり、それを指導したのは共產黨員であった。國民黨は、この罷工にたいしてどのような態度をとったであろうか。

罷工開始時の數日には、一部の共產黨員のあいだには、つぎのような機械論的なセクト主義的見解があった。

共產黨はプロレタリアートの政黨である。罷工はプロレタリアートのする事である。したがって省港罷工は、完全に共產黨が獨力で指導しなければならず、國民黨に口だしさせる必要はない。國民黨に口出しさせれば、罷工の指導權を奪うことを可能にする。(二七三頁)

しかし事實は、共產黨が指導權を失うかどうかは、罷工労働大衆の中での、共產黨の努力いかんにかかっているの

である。國民黨の口だしを拒絶することは、罷工にたいする共產黨の指導權の強固さを、なんら保證するものではない。そののみか、實際には國民黨の援助をも拒絶する結果となる。當時の力關係からして、國民黨の援助がなければ、罷工は一週間もたたずに内部からくずれたであろうとおもわれる。一〇幾萬の罷工労働者の食費は、一体どこからえられるのか。うたがいのもなく、機械論的(形式主義的)なセクト主義的見解からは、なんらの解答もだせないだろう。このような見解は、なににもまして共產黨自身の相互批判によって克服されねばならなかった。當時罷工は、國民黨の「口だし」を必要としただけでなく、協議に参加させねばならなかった。さし迫って必要とされた援助は、ここからえられるのである。このことと指導權とは、完全にべつの事柄だと鄧中夏らは考えていた。

當時國民黨は劉楊戦争に勝利し、民衆の運動をも積極的に支援した。とくに鐵道工人・海員の罷工は、國民黨に巨大な軍事的利益をあたえた。したがって國民黨はかれらに好感をもち、省港の罷工がおこり、共產黨が經濟的援助を要請したとき、國民黨はおしみなくそれを承認し實行した

のであった。各方面の經濟的援助は、これにつづいておこなわれた。罷工開始から、二六年六月までの罷工委員會の收入は、國內寄附金二五萬元、華僑寄附金一三〇萬元、租捐および政府が取扱った寄附二八〇萬元、紳士・富豪の寄附二萬元、英商品競賣收入四〇萬元、罰金二〇萬元、その他二〇萬元、合計四九〇萬元であった。さらに國民政府財政部は、終始毎月一萬元を罷工委員會におくった。

いうまでもなく、罷工にたいして國民黨内部の態度は一致していなかった。右派は終始これに反對していた。左派は、はじめ半年は熱烈な支持をしめた。その理由は、すでにのべたように、かれらが政權をにぎることができたのは、労働者の力量に依據してはじめて可能であったからである。したがって省港罷工を支持せざるをえなかった。

また、國民政府自身は、この罷工によって利益をうけたであろうか。下の表のように罷工以來、政府の收入は明かにふえている。

このようなことが可能になった理由は、一方では廣東が國民政府によって統一されたからであり、他方では省港罷工によって、香港と交通をたち、自主的計劃的な財政整理

	月平均收入	全省收入
1922年	85.8	1,000.0
1924年	65.5	798.6
1925年 8月	150.0	—
" 10月	361.6	—
" 11月	380.0	—

(單位萬元)

をやったからである。從來廣東の經濟は、香港に支配され操縦されていた。たとえば廣東政府の設立した中央銀行は、孫文在世當時、人民がその紙幣を信用するよう聲をからして要求したけれども、香港紙幣の操縦をのがれえなかっただけでなく、中央銀行發行の紙幣價值は騰落常なく、十分な信用もえられなかった。罷工直前、中央銀行紙幣一元は、わずか三、四角に通用するにすぎなかった。罷工後、沙基事件も作用して、廣東の民衆は香港の紙幣をボイコットし、封鎖したので、香港紙幣は市場からはほとんど姿をけし、中央銀行はこの機會に紙幣を整理し、また香港の操縦をうけることもなかった。したがってその信用は恢復し、營業は擴張し、紙幣も額面どおり通用した。この一例によっても、他のことを推察しうるであろう。

以上の事實からも、左派の國民政府が熱心に罷工を支持した理由がわかるであろう。

しかし、左派は、一九二六年以降、罷工にたいして冷淡になった。廣東の統一が實現されると、左派はもはや罷工労働者を必要としなくなった。それに、右派は、罷工がいかに「不法」であるかを宣傳し、それをよりどころとして罷工を支持する左派を攻撃した。これによって左派は小ブールのな動搖性をおこし、ついに罷工からしだいに遠ざかっていった。

三月二十日のクーデター^{*}（いわゆる蒋介石による中山艦事件）によって、民族ブルジョアジーの新右派（鄧中夏はこう規定している）が國民政府の政權をにぎり、省港の罷工に反對したが、斷乎たる罷工解散の舉にはでなかった。それは、「新右派自身、自らの力量に不安をもち、一舉にプロレタリアートを敵にまわすことはできなかったからであつた。省港罷工は、このときすでに完全に一つの強固な勢力を形成しており、さらにそれは、まさしく帝國主義との闘争を基本としていたからである。新右派は、なんの理由もなく罷工を解散させる力も十分でなく、またその道理もなかったのである」と鄧はのべている。

^{*} 蒋介石の中山艦事件、すなわち三月二十日のクーデターにつ

いては、「中國解放闘争史」一二七—一二八頁註二、二二四頁、「支那近代百年表草稿」二八五頁および、佐藤俊三「支那の國內闘争—共產黨と國民黨の相剋—」（一九四一年）などに精しい。一九二七年四月におこなわれた、蒋介石の上海クーデター（四・一二事件）につながる、國民黨新右派の最初の積極的な行動である。またこのとき、國民政府首席汪兆銘は、引責辭職してフランスに渡り、國民黨の指導權は新右派に移つた。「支那の國內闘争」には、中山艦事件に關する蒋介石の覺書を出しているが、その中で、蒋介石は、「事件の真相にふれるのを好まない」と明言している。中山艦事件について、事の外貌はつかみえても、具體的な經過や關係になると、まだわからぬ點がおおい。

一〇、香港の帝國主義と廣東の政局

罷工にたいする香港帝國主義の態度は、何度か變化をかさねているが、それはすべて廣東の政局と密接に關連している。

第一期—強硬時期。罷工がはじまった時、香港は一戦をまじえるのに急であつた。いわゆる市民大會についてはすでにのべたが、ロンドンの拒否にあうと、轉じて「中國をもつて中國を制する」政策をとつた。一方では北方の軍閥と結合して廣東省に侵入し、他方では廣東内部のあらゆる

反動勢力と結合して騒亂をおこさせた。前者について、香港はひそかに資金をあたえて、胡・許兩派のクーデターをたすけた。文華堂の二〇〇萬元の賄賂、江門の梁鴻楷部隊にたいする新兵器の供給などはそれであり、また廖仲愷の刺殺もここにあった。しかしこの政策は、共產黨と國民黨の斷乎たる處置によつて失敗した。つぎに香港は、陳炯明と鄧本殷をたすけた。當時陳は、香港に出先機關をもつて、兵隊を募集し、軍馬を購入し、汕頭にむかう罷工労働者、海豊・陸豊の農民、革命的學生ら二〇〇名を拉致した。香港はまた、北洋艦隊の軍艦四隻を南下させて、陳・鄧の反攻を援護させた。また香港は、土匪袁帶・林警魂を煽動して中山縣を陥落させ、ここを守備していた糾察隊一支隊を全滅させた。

當時、罷工委員會は、罷工收拾を準備していていた。九月二十八日、香港の中流の中國商人代表が廣州にきて、罷工委員會の提出した、省港の労働者および學生の要求約三十餘項をもちかへった。香港總督は、「だれが要求などもつてかえれといったか!」とどなりつけた。香港は罷工の解決など意中になかったのである。しかし香港の陳・鄧援

助も失敗したのである。

第二期―軟化時期。陳が汕頭を占領すると、ただちに汕頭の罷工を解散させたけれども、革命軍の汕頭奪回に呼應して労働者はたち、香港を再封鎖した。鄧は香港から八〇萬元をうけ、八艘の船舶によつて香港に食糧をはこんだが、そのルートも、革命軍の瓊崖進攻によつてたれた。北洋艦隊も、陳・鄧の敗北によつて、意氣消沈して北歸した。すでに長期化した罷工のとはちりをうけた香港の中國商人の間には不満が高まりつつあった。さらに強化された國民政府にたいして、かれらは廣東支持にかわり、「懇親團」を組織して、十二月二十六日、その三〇〇餘名が廣州にきた。つづいて「華僑參觀團」が組織され、ほぼ同人数が廣州にきた。このような中流中國商人の行動は、直接には國民黨支持の意志表示であるとともに、間接には香港にたいする示威でもあった。香港は、軍事的にも不利となり、また市民の支持もえられなくなりつつあったのである。このような力關係の變化は、香港の態度を一變させ、四人の全權代表を廣州に派遣して罷工を解決する用意があることを宣言し、香港の民心の安定をはかった。香港は全權代表派

遣に先だって、中國商人八名を廣州におくり、廣東側の眞意をさぐらせた。八名の中國商人代表は、罷工委員會と經濟的要求を協議した。

いふまでもなく、われわれは經濟的要求をもつが、同時に政治的要求をもっている。經濟的要求だけを協議するのでは、問題の根本的解決とはいえない。(二七八頁)

罷工委員會の主張はこのようであつた。

第三期——猶豫の時期。一九二六年一月の國民黨第二回代表大會以後、廣東の政局には重大な變化がおこつた。^{*}國民黨大會において、共產黨は新右派にたいする讓歩政策をとリ、新右派は廣東における勢力を増大し、左派の政權に動搖がおこつた。この時、左派に屬していた蔣介石は新右派にかわり、ひそかに反革命クーデターを準備しはじめた。

また北方では、張作霖・吳佩孚の連合軍は國民革命軍にたいする討伐戰を展開し、勝利を擴大しつゝあつた。このような情勢は香港の態度を硬化させ、全權代表派遣のひきのばしを策し、ついに一月二十五日、突如罷工の解決をやめると宣言し、香港における一切の反英行動を嚴重に處分しはじめ、罷市をおこなう商人にたいしては、その財産を沒

收し、本人を監禁することを布告した。この時、香港の労働者は第二回目の罷工をやり、約一萬が廣東にひきあげた。
〔中國解放闘争史〕三五九頁

香港の帝國主義は、一方では廣東のクーデターをまっていたし、他方ではあらゆる手段をつくして、クーデターの情勢を促進しようとしていた。かれらは、「イギリスは一〇萬の大兵をもつて、中國に進攻するに決した」という宣傳を強化した。上海の英紙は、

ロンドンには、すでに中國にたいする武力干涉に決し、一〇萬の大兵が、北方は天津を攻撃し、中部では上海・漢口を攻撃し、南方では廣州を攻撃する豫定である。(二七九頁)

と報じた。同時にイギリス公使は、つぎのような質問を北京政府にだした。

結局、廣東の排英運動を制止しうのかどうか。できないというのであれば、イギリスは、かつて重大なる教訓をあたえるであろう。イギリス國會は、すでに廣東にたいする將來の軍事費豫算、日當り一五〇萬元を支出することに同意した。

このような威嚇は、右派が罷工の解散を提議する口實をあたえ、また右派と香港との結合をうながすものであつた。伍朝樞らは、この時期に香港と連絡し、國民政府委員會の

席上で、罷工糾察隊の「不法」を告發した。また公安局長吳鐵城は、「罷工労働者は、劉楊よりも悪質な奴らだ、ただちに銃撃する」と市民に宣傳し、市民と労働者とは分離しようとした。これらのデマや中傷は、一方では罷工にたいする左派の信頼を動搖させ、他方では右派に彈壓の口實をあたえるものであった。

この時、二月二十日に、突然粵海關の稅務司は、稅務の停止を宣言した。當時海關には外人が使用されており、粵海關にもイギリス人が任用されていたのである。「糾察隊が入港船舶の貨物を抑留し、稅關の檢査をうけさせない。これでは職務を遂行することができない」という理由であった。「罷工労働者は全く政府の命令をきかない。われらこそ、おまえらにかわって教訓をするのだ。」これが國民政府への教訓である。また廣東の商人は、「海關を停止したのは、おまえらが糾察隊からうけている壓迫を輕減しようとするのだ」とつげられた。これらの一連の言動は罷工労働者と罷工委員會とを孤立させて罷工を破壊し、廣東の新右派によるクーデターを促進させようというものであったことは明かである。しかしそれは、すぐにはその効果を

あらわさなかったし、香港のまちこがれるクーデターもあらなかった。

三月十九日、香港は廣東に人をもって汪兆銘主席に會見させ、こう申入れをした。

香港政府は、罷工を解決する誠意を有する。すでに輔政司・律政司・華民政務司を代表とすることに内定した。ただ汪主席の親書さえ受取れば、三代表はただちに來廣するであらう。

しかし翌日、廣東に蔣介石のクーデターがおこり、罷工委員會は軍隊に包圍された。^{***}そして香港の帝國主義の態度も一變した。

第四期Ⅱ再強硬期。廣東における三・二〇クーデターによって、香港は罷工解決の意志をかなぐりすてた。香港總督は、喜色満面にみちて歐米商人大會を召集し、意氣高らかに、「つつしんで諸君に、よいニュースを一つおしらせする。二十日に、廣東政府が發足したのですぞ」と、聴衆の高唱する萬歳の中につたえた。もちろん、三代表は出發しなかった。四月九日、香港は伍朝樞と協議し、ただちに香港政府は、罷工期間中の賃銀・および復業しえざりし損失の賠償は、すべて支給しない。またその辨法を講ずることもゆるさない。

と聲明した。いまや公然と罷工の經濟的要求すらも拒否し、同時にその強硬な態度を明かにしたのである。これはうたがいのなく、三・二〇クーデターの直接的な影響である。

今次の省港罷工は、もともと直接勝利する可能性がきわめて大であった。しかし三月二十日のクーデターによって、その可能性は完全に消滅した。

鄧中夏はこのように評價している。

* この大會で、西山派の除名が決議された。またこの大會の報告によると、當時、國民黨の黨員数は五〇萬をこえ、廣東省内には、九九七の支部と、四八、〇〇〇の黨員がいた。また第二回の大會は、第一回大會の方針を確認し、三カ條の經濟綱領を決定した。

** 海關の外人管理は、一八五三年、小刀會が上海を占領し、道臺が逃亡したため、英・米・佛の三國領事が徵稅管理を實施したのにはじまる。五四年、海關は復活し、三國と道臺とによる關稅管理委員會を組織し、上海の新海關が成立した。一八五八年の天津條約後、全國の海關は上海の例に統一され、外人吏員を任用することとなった。

*** このとき、突如廣東全市に戒嚴令をしき、共產黨に屬する各軍の政治委員、罷工委員會の委員數十名を逮捕したといわれている。

一、中英の交渉

六月五日、國民政府は香港に書翰をおくって、罷工問題の解決のために商議することを提案した。それは、北伐という、國民革命の最大の使命を實行するために、罷工委員會が香港との商議に同意したからである。香港は、罷工はすでに過去の事件であるとして、英貨ボイコット問題の解決を主張したけれども、國民政府は、罷工問題こそ、依然として政治的經濟的な重要問題であると主張した。九月十五日、廣州の外交部で、第一回中英會談が實現した。この日は、ただ中國側の歡迎の辭がのべられて閉會した。十六日の第二次會談には、國民政府代表の意見書が提出された。その内容の大意は、

廣東人民が英貨ボイコットをおこした直接的原因は、沙基事件であり、沙基事件の重要な背景は「五・三〇」事件である。廣東が省港の罷工をやり、經濟斷交によって排英運動を展開したのは、「廣州は中國の民族主義の最大の中心地であり、廣州はこの事件において、民族主義を堅持して對抗し、中國民族主義と外國帝國主義との間の鬭争の顯著なあらわれ」だからである。中國は民族主義によって外國を處理し、帝國主義をまっとうから排斥した。これは、中國の外交史上、最初の事である。何のために香港は廣東にたいして經濟的財政的封鎖を實行したのであるか。沙基事件に際し、國民政府の提案した解決條件を

拒否したのはなにゆえか。

というものであった。十九日の第三次會談には、イギリス代表がその回答を提出した。

五・三〇事件は自衛行爲にはかならない。沙基事件は、中國側が先に發砲したのである。省港の罷工は少數分子の壓力によるものであつて、香港はいまだかつて廣東を封鎖した覚えはない。

二十一日の第四次會談では、中國側はこれに反駁し、同時に第三者による公正な法廷を組織するという具体案をだした。このためには時日を要するので、さらにつきの早急に關係を回復するための三條件を提出した。

- (1) ふたたび沙基事件が発生せざるよう保證すること。
- (2) 公平の原則により、沙基事件の死傷家族に賠償を支拂うこと。

(3) 香港・廣東間の正常な關係が破れたことにより生じた大量の失業問題を解決すること。そのために概括的な條項を作成すること。

イギリス代表は、第三者による考查法定の設置については本國政府の訓令をまちたいとのべ、三條件については、反對の意向をしめし、賠償問題の除外を主張した。中國側は

讓歩して、考查法廷成立前に、借款を行い、これは双方が分擔し、將來イギリス側が、考查法廷に勝訴した場合には、香港の負擔した借款は、國民政府が償還すべきことを提議した。イギリス代表はこれに反對した。のみならず中國に實業借款をあたえ、それを黃埔開港の資金とし、さらに粵漢・廣九兩鐵道を連絡する新線の敷設を條件とし、その借款の監督は、廣九鐵道協約にしたがつて、英人總工事監督・總會計各一名を雇用すべしという新提案をした。この日、罷工委員會は、廣東工農商學各界と連合して、一〇萬餘人の大示威大會を召集し、徹底的に要求を爭取するとの宣言を發表した。二十三日の第五次會談では、双方とも、その提議を條文化して本國政府の訓令をまつこととした。ここに交渉は一段落し、形式的には無期延期となったが、實際には決裂とおなじことであつた。要するに交渉は、罷工の解決については、一步も前進できなかったのである。

* 北伐は、中國革命の過程における一大事件である。それは、北伐によつて、中國革命は最高度に發展し、革命勢力の支配する領土は長江流域にまで擴大し、中國の勞働運動・農民運動は長足の進歩をとげたからである。北伐は當時の中國の革命の高潮が要求したものである。そして、直接北伐を促進し

たのは、省港の罷工であつて、それは實に巨大な原動力となつた。……北伐中、省港の罷工労働者が、積極的に参加したことはいうまでもない。かれらは東征・南征のときと同じく、輸送隊・宣傳隊・衛生隊を組織し、軍隊にしたがつて北伐に向つた。とくに輸送隊の三千餘人は、北伐軍への巨大な援助となつた。湖南・廣東の省界には、五嶺山脈のように、けわしい山がそびえ、道はけわしく、これに加えるに炎熱蒸暑の中を、罷工労働者は、重荷をかついて峠をこえていつたのであつて、その困苦は推測に難くないであらう。そのために病にたおれる者は、幾百人にものぼつた。このような罷工労働者の援助をえたことによつて、北伐軍の進撃は、異常な速さであつた。(二八一頁)

一二、結末とその意義

中英交渉の延期後、罷工委員會は、全國同胞に致すの書・海外華僑に致すの書・全國工會に致すの書・國民黨と國民政府に致すの書を各々發送して中英交渉の經過について報告し、つぎの三事について教えを乞うた。

- 一、先烈的深い恨みを忘れて、無條件に屈服すべきか？
- 二、そもそも屈服するのみならず、さらにすすんで、イギリスの提出せる實業借款をうけるべきであるか？
- 三、あるいは屈服を願わず、さらにイギリスの攻撃をう

ければうけるほどいつそうはげしく奮闘をつづけて、最後の勝利を求めるべきか？

この三つの解決法は、罷工委員會としては、

われわれの罷工が、民族の問題に關し、われわれ一個の問題ではなく、どれによるにしても、はじめの小異ものに千里のちがいを結果するのであるから、國の内外の同胞が、ただちに決定をあててくれることを求めざるをえない。

のであつた。さらに委員會は、

われわれは奮闘し、一切を犠牲にし、わがみの利害にはもはやとらわれるものではない。もし同胞の指示をうれば、われわれはただ固くそれに従い、水火に赴くことも敢て辭さない。

ことを明かにした。各方面から續々と回答がよせられたが、それらはみな、「奮闘をつづけるべきであり、(われわれは)そのうしろ楯となることを誓い、最後の勝利をえなければならぬ」とはげましていた。

この罷工の解決にたいして、共產黨はどのような態度をとつただろうか。罷工委員會は、何度か罷工の收拾を準備した。廖仲愷の暗殺事件前後に、一度具体化しようとなつた。それは、北方ではすでに五・三〇運動が低調となりつつあり、廣東だけが孤軍奮闘しているという情勢のもと

でなされた。各界の代表各二名と罷工代表八名によって外交代表團を組織して北上させ、省港罷工の政治的要求は全國民と連合して鬭争し、罷工は、ただ香港と經濟的要求を解決すれば就業することとした。しかし、この方針は、香港側が硬化して問題の解決をのぞまず、また香港封鎖が、陳・鄧討伐に有利であつたので中止された。

二六年一月の國民黨大會前後に、第二回目の收拾計劃が準備された。それは北伐の準備仕事をまえにひかえて、それに全力をそそぐ必要があり、廣東側もかなりの讓歩を示していたし、香港側も反革命の失敗と國民政府の強化をまえに解決の方向に傾きつつあつた。しかし國民黨大會後、國民黨には新右派が勢力を擴大し、それとともに香港側も硬化しはじめ、また共產黨も、罷工の壓力によつて右派の反對をおさえようとした。三・二〇クーデターがおこり、民族ブルジョアの攻勢に對抗するために、共產黨は罷工を收拾して、自ら武装解除することをのぞまなかつた。五月の第三回全國労働者大會前後、北伐の必要に迫られて三度目の罷工收拾の準備を行った。労働者大會は、國民政府・香港政府・廣州商人・香港商人および罷工委員會の各代表に

よる委員會を組織し、罷工の解決を討議することを提案した。五者委員會を組織するという提案は、當時香港にとんでいた、「香港はかねをださぬというのではない。ただそれが罷工の指導者あるいは過激分子の手におち、ひきつづき香港に反對する資金となるのをおそれるのだ」というデマにたいして、有効な提案であつた。しかも香港政府はこの提案を無視した。

このころ、陳獨秀・魏琴は、「極左だ。終始罷工を收拾する僅かの意志すらもたない。まさにバカさわざだ!」と攻撃しはじめた。しかし以上のような情勢で、罷工を中止するとすれば、罷工は無條件で解散するよりほかないだらうし、それはイギリス帝國主義への無條件降伏とおなじことである。蘇兆徴・鄧中夏らは、陳獨秀らのこのような右翼日和見主義には徹底的に反對してたかつた。しかも當時譚平山は、上海の共產黨中央の機關紙に、「省港の罷工はおわつた!」と宣言した。省港罷工は、廣東では明かにおわつていなかった。しかも上海のかれらは、「おわつた」と宣言したのである。これはまさに、廣東の労働者にたいする完全なうらざり行爲というよりほかない。

七月に國民革命軍は、蔣介石の總指揮のもとに北伐を開始した。このとき自動的に罷工を中止することが決定された。

北伐とともに、罷工の自動的中止を切實な問題としたものには、も一つ農民との關係があつた。香港封鎖の長期化によつて農産物は滞貨し、農民に苦痛を感じさせ、その不安をひきおこしていた。二六年五月以降は、各地に農民と糾察隊との衝突が頻發しはじめた。新しい農産物が市場に出荷される時期であり、農民は封鎖線を破つてもちだそうとしたからである。それが糾察隊と衝突したのである。

もちろん、封鎖いらいそれまでに各港口に戦鬪がくりかえしおこつた。たとえば沙魚涌の戦鬪は、糾察隊と土匪の鐵甲隊との衝突であつたが、双方から數十名の戦死者を出した。このとき香港は軍艦と飛行機を出動させて土匪をたすけた。太平の戦鬪は、香港に煽動された土匪・悪商人との交戦であつた。中山の戦鬪に糾察隊は全滅したが、それは香港から武器をあたられた土匪によるものであつた。

その他、白鵝潭・淡水・前山などで、協同した悪商人・土匪との衝突があつた。しかしこれらの戦鬪においても、農

民は糾察隊を支持し、中立的態度をとつたものは極少であつた。しかし二六年の五月以降になると、農民は糾察隊に反對しはじめた。たとえば寶安の、イギリス領との境界に近い村落の農民は、武裝して、まっこうから糾察隊と對抗しており、それは糾察隊によつておさえられたが、明かに封鎖にたいする農民の不満は増大しつゝあつた。罷工委員會はこのことを無視できなかつた。あらゆる事情が、封鎖と罷工の早期解決を必要としていた。

罷工労働代表者大會は、慎重な討論をやつた。委員會はつぎのような具體的解決策を提出した。關稅に、25%を附加徴收し、それを罷工收拾の費用とする。各罷工労働者はまず一人一〇〇元をうけとつて各地で（とくに香港で）就職口をさがし、六カ月後にも就職口のないものは、廣州にすれば、罷工委員會がもとどおり宿舍と食事を提供する。25%の附加稅收入では、一度に、全罷工労働者に支給するには不足するので、五回にわけて支給する。各グループを二萬人づつとし、五カ月で全員に支給する。問題の決定後、國民政府は各國領事に25%附加稅を通告したが、ついに各國はそれを承認せざるをえなかつた。

一九二六年十月十日、罷工委員會は廣州各界の民衆大會を召集し、香港にたいする封鎖取消しと、罷工の終了を宣布し、「香港にたいする封鎖取消しは、將來根本的に香港を回收する準備のためである」と宣言した。

十月十一日から、海關に附近して、別に國民政府と罷工委員會の共同組織による。25%附加税徴收機關が設けられた。この25%附加税は、全中國に大きな影響をあたえ、海關における25%附加税の前例として各海關に實行されることになったのである。

罷工終了後も、罷工委員會はなお存続し、國民黨の全体的な反動化後、二七年十月、廣東に歸來した汪兆銘によって武力彈壓をうけてはじめて解散した。

それでは、罷工終了宣言まで約一六カ月、罷工委員會の解散まで二八カ月の長期にわたる、まさに世界の労働運動史上、もっとも長期にわたった省港の罷工は、どのような意義をもつてであろうか。

以上にのべてきた省港罷工の経過からも明かなように、省港罷工は、當時の全國的な労働運動の高揚の一環であり、廣東時代の國民革命における、プロレタリアートの指導的

な役割をしめしている。省港罷工委員會は、まさに獨立したプロレタリアートの政權の性格を明確にそなえていた。したがって民衆團體におけるその指導力はおおきく、廣東にたいする政治的影響力もまた巨大であった。のみならず、廣東全省の労働者を組織化し、農民をもまた組織化（九四縣中の八五縣に農民協會を組織した）^{*}したし、このとき共產黨は、わずか四〇〇名の小グループから、一躍萬人をこえる大衆的政黨に發展したといわれる。こうして、五・四運動の時はじめて政治的舞台におどりでた中國のプロレタリアートと共產黨とは、ここに、政治的にも社會的にも、確固たる基礎をそなえるにいたったということができる。さらに省港罷工は、弱勢だった國民黨と國民政府の強力な支柱となつたし、また廣東の統一と北伐の實行——革命の高揚に少なからぬ影響をあたえている。このことにおいて、省港の大罷工は、まさに「罷工」以上の罷工であつたといふべきであろう。

— 一九五四・二・一五 —

^{*} 鄧中夏はこういつている。しかし「第一次國內革命戰爭時期の農民運動」によれば「全省の農民協會成立後、農民解放運動は中心機關をもち、いつそうすみやかに發展した。一九二五年五月から二六年五月の一年間に、組織農民は二一萬から六二萬以上となり、全人口の16分の6をしめ、農民の組織をもつ縣は、二一縣から六一縣となり、全省の縣数の%をしめた。全省の農民の組織は、いつそう團結し、革命に参加する能力は、いつそう増進した」とある。（三七頁）

The Labour Movement at Canton in 1925~26

Makoto Ikeda

In 1924~26, the labour movement reached a new height in China while the Nationalist Revolution developed remarkably. But the latter was driven back and rendered inactive by the coup d'état of Chiang Kai-shek in 1927. This was no accident but an inevitable result of the revolutionary process, and governed its subsequent direction. The base of the revolutionary movement was Canton, the general strike of 1925~26 was its background. The striking workers were supporters of the Kuomintang Government and the "Northern Expedition." So we can say that the strike was no mere strike.